

身体活動を使った音楽鑑賞に関する一考察

山崎 浩 隆

A Study on Music Appreciation Using Body Movement

Hiroataka YAMASAKI

(Received October 1, 2012)

はじめに.

小学校学習指導要領では, 昭和33年に告示された第3次学習指導要領から平成元年の第6次学習指導要領まで音楽鑑賞の学習で用いる楽曲について, 必ず指導しなくてはならない「共通教材」が, 学年ごとあるいは2学年ごとに3曲程度示されていたが, 第7次学習指導要領以降, 指導者が音楽の鑑賞領域における教材曲をすべて選択できるようになった。

学習内容をみると第8次学習指導要領では指導すべき学習内容の観点として「共通事項」が新たに設定され, 鑑賞領域においては, 「共通事項」と教材曲の2つが学習指導において内容にも方法にも大きく関わることとなった。

しかし, 鑑賞学習では, 音楽に含まれる複数の要素から聴き取らせたい「共通事項」を取り出すことが難しい。子どもたちは同じ音楽を聴いても様々なことを発言する。聴き取っている要素が異なり, そこから感じることも異なるからである。そのような状況で指導内容を獲得させることは容易ではない。要素が複合的に関わり合っている音楽から聴き取らせたい要素を聴き取らせるようにするためには, それが可能となるような楽曲を探し出さか指導方法を工夫するかのいずれかの方法をとる必要がある。本稿では, 学習指導に教科書教材を用いられることが多いことから後者の方法, そしてそのために身体を使うことの効果を検討する。

鑑賞という用語については「鑑賞の活動では, 楽曲を全体にわたって感じ取る能力, 楽曲の構造を理解して聴く能力, 楽曲の特徴や演奏のよさを理解する能力を伸ばし高めていく」という学習指導要領に示されたものをその内容とする。学習指導要領を拠り所とするのは, 直接子どもたちを指導している学校教育では, これをもとに毎日の学習指導を行っているからである。教科調査官として第8次学習指導要領改訂にかかわった高須は「聴き取る力や感じ取る力(音楽的な感受)との差異を明確にするため, 楽曲を全体にわたって味わう能力を育てるための指導内容とした。すなわち, 部分を聴いて感じる力よりも, 部分と部分のかかわり合い, 楽曲全体を鑑賞する能力を育成することを重視している。」¹⁾と述べている。このことから, 部分を聴いて感じることをもとに部分と部分とのかかわり合い, 楽曲全体を知覚・感受することが鑑賞の学習だと考える。

1. 先行研究よび研究の目的・方法

身体活動を使った分析と鑑賞との関連についての先行研究を見ると, 小島(1983)や古市(2005), 城(2009)のものがある²⁾。小島は, 身体活動はリズム指導だけでなく, 分析や表現に有効であることを明らかにしている³⁾。

古市は, 中学校におけるベートーベン作曲交響曲第5番ハ短調第1楽章の鑑賞にパートごとに色の異なる布を使って身体表現をさせる実践を行っている⁴⁾。パートのかかわりを布の配置で表現するためには, 音楽を聴いて分析する必要があることから, 身体活動を分析の手段として活用しているのである。城は, 音楽様式が拍の流れに違いがあることを小学6年生を対象に音楽に合わせてステップを踏ませることで感じ取らせ, それを表現に生かすという実践を行っている⁵⁾。身体活動を取り入れることで拍の流れの違いを明確に感じ取らせることができ

ることを報告している。これらの先行研究から、詳細な違いを聴き取らせる上で、身体活動を取り入れることが有効であることが分かる。

現在、小中学校の音楽科学習では共通事項として設定された音楽の要素を聴き取り感じ取らせる活動が行われている。そこでの指導上の課題は、いずれかの要素に限定し、その機能を知覚・感受させなくてはならないが、音楽は複数の要素を内包しそれらが複合的に機能しているため、指導内容に即した知覚・感受を引き出すのが困難なことである。音楽の中から特定の要素だけを意識し聴取できるようになったり、要素と要素とのかかわりを知覚・感受できるような指導方法の開発をすることが必要である。

そこで、身体活動を取り入れ特定の要素について知覚・感受したり、複数の要素のかかわりを知覚・感受したりすることができるようになれば、共通事項で設定された音楽の要素が複合的に機能することの効果分かり、より深く曲想を感じ取ることができるようになるのではないかと考えた。本稿では複数の音楽の要素のかかわりを聴き取らせるために身体活動を取り入れることの有効性を検証する。

方法としては、身体活動を使って音楽の要素を聴き取らせた2つの実践をもとにその効果を考察する。

実践①は、音楽を聴いて「速い」と感じる要素は速度の変化だけではないことを確認したものである。音楽の速度に変化がなくてもリズムが途中から細かくなると速さが速くなったような感じを受ける。それを確認させるために身体活動を取り入れ、リズムの変化による効果をもとに曲全体の構成を感じ取らせるものである。

実践②は、2つの旋律が重なっている音楽から身体活動によってそれぞれの旋律を確認し、重なりを知覚・感受することから鑑賞へとつなぐという実践である。

いずれの授業も、授業者は筆者である。

2. 実践① 速くなったと感じる要素の確認

(1) 指導内容と授業展開

指導内容：楽器の音色、リズムや旋律の変化を感じ取り、変奏曲の楽曲構成を理解する。

題材名：シューベルトに挑戦しよう

教材 シューベルト作曲 ピアノ五重奏曲「ます」第4楽章（教育出版「音楽のおくりもの5」所収）

対象：小学校5年生

指導時数：1時間

題材の目標と評価規準

観点1： 旋律やリズム、楽器の音色の変化に関心をもって聴こうとしている。（観察・学習シート）

観点4： 変奏のおもしろさや美しさを自分なりの視点をもって曲全体を味わう。（学習シート）

授業の概要

教材曲の第1変奏と第3変奏を取り出し比較聴取させることにした。それは、曲としてのまとまりを感じ取らせる際、主題と比較しやすくすること、また、比較する要素が分かりやすいものであるということの2点からである。第1変奏と第3変奏とを比較することによって子どもたちに気づかせたいのは、楽器の音色、リズム、旋律、強弱、速度の5つの音楽的な要素である。これらの要素に気づかせるには、2つの変奏を比較聴取させることが妥当だと考えた。

さらに、子どもたちの聴取意欲を喚起するとともに、比較聴取によって変奏のつながりを知覚・感受、思考・判断させるため、抽出した2つの部分が第1と第3のいずれの変奏であるかを伏せ、それぞれ第1変奏をB、第3変奏をAとして提示するようにした。つまり、学習課題は、AとBのいずれが第1変奏あるいは第3変奏か、というものである。

授業展開

- ① 鑑賞曲の曲名と変奏曲が主題と5つの変奏、そして終わりの部分であるコーダの7つの部分からできていることを知る。
- ② そのうちA、Bとして抜き出した第1変奏と第3変奏の2つの部分を「曲全体がまとまりを感じるように」という視点から、いずれが第1変奏、第3変奏であるかを決めた後、曲全体を鑑賞するという学習の流れを知る。

- ③ A, B 以外の部分を聴き, 曲全体の大きな流れを知る.
- ④ A, B を聴き, 2つの違いを聴き取りワークシートに記入した後, 話し合いによって違いを確かめる.
- ⑤ 第1変奏, 第3変奏がA, Bのどちらであるかの予想をワークシートに記入し話し合う.
- ⑥ 曲全体を鑑賞する.

熊本市のA小学校で2009年10月13日に実施した.

(2) 身体活動による楽曲分析

楽曲全体を味わうことができるようにするためには, まず全体を見通すことができるようにすることが必要だと考えた. 鑑賞する教材の曲名と作曲者を知らせ, 教材曲が変奏曲であること, 主題を含め7つの部分でできていることを知らせた後, 「シューベルトさんに挑戦してもらうために第1変奏と第3変奏を抜き出し, AとBとしました. AとBのどちらが第1変奏でどちらが第3変奏かを考えてください.」と課題を提示した. そして, 「聴いてみなくては考えられませんね.」と話し, 第1変奏と第3変奏を除いた部分を通して聴かせた. その後, 「では, 抜けていたのはこれから聴くAとBです. よく聴いて順序を考えましょう.」と言って聴取させた. その後, どちらが第1, 第3変奏かを決める前にそれぞれの変奏を聴き比べて気づいたことを記述させた. その気づきをもとにAとBのどちらが第1変奏, 第3変奏かを予想させた.

記入後, AとBの違いについての発表の場を設け, 断片的な曲想と要素を結びつけるようにした.

以下は, 児童の主な発言である.

(児童a) Aは楽しいリズムでBはゆっくりとしてやさしいリズム.

(児童b) Aは楽しい感じ, Bはゆっくりとしたやさしい感じ.

(児童c) Aは元気で速度が速くて元気に遊んでいる. Bは元気はないけど明るい, 朝起きてねむいって感じ.

(児童d) AとBは1拍に入っている音の量が違って

(児童e) 量って何?

(児童d) 音の数が違うから, その分, 音の長さも違って来るからAは1拍に入っている音符の数が多いから速く感じて, Bはあまり多くないからゆっくりに感じる.

児童dのこの発言を確かめるために, AとBを聴くことになった. また, 「やっぱり速い」という声が児童から挙がったので, 全員で手を振って指揮をしながら聴き比べさせ, 速度には大きな変化がないことを確認した. このことから, 児童dの発言のように速度に変化がなくても同じ拍の中でリズムが細かくなると速く感じることも確認した.

また, 楽しい, 元気で明るいなどの曲想を拍の中の音の数の違い, つまりリズムから感じていることを確認した.



譜例1 Bとした第1変奏の一部



譜例2 Aとした第3変奏の一部

〔 枠で囲んだ部分はピアノパートである. 譜例1と譜例2まで速度変化の指示はない. 譜例2, Aとした第3変奏ではピアノのリズムが細かくなっている. 〕

3. 実践② 音の重なるの確認

(1) 指導内容と授業展開

指導内容：楽器の音色，リズムや旋律の変化を感じ取り，変奏曲の楽曲構成を理解する。

題材名：せんりつが重なり合うおもしろさを感じとりましょう

教材 ビゼー作曲 「アルルの女」第1組曲から「かね」

(教育芸術社「小学生の音楽3」所収)

対象：小学校2年生

教科書では3年生を対象としているが，身体活動を行うことで2年生でも鑑賞させることができるのではないかと考え，本研究では小学2年生を対象とした。

指導時数：1時間

題材の目標と評価規準

観点1：旋律の重なりや曲想の変化を聴き，意欲的に身体で表現しようとしている。(観察)

観点2：・旋律の重なりを知覚・感受している。・曲想の変化を知覚・感受している。(観察)

観点4：全曲を通して聴き，旋律の重なりや曲想の変化から思い浮かべた情景を伝えようとしている。

(観察・学習シート)

授業の概要

この曲は，ABA'の三部形式で構成されており，AとA'ではホルンによる鐘を表す旋律とバイオリンによる旋律が重なり合う。本稿では，ホルンによる旋律をa，バイオリンによる旋律をbとする。(譜例3)

この2つの旋律を身体活動によって各々を個別に聴き取ることができるようにする。さらに，2つが重なりを身体活動で視覚的に確認しながら音楽を知覚・感受させるものである。

授業展開

① 教材曲「かね」の2つの旋律の違いをロボットと人に例えて聴き取り旋律にあわせて身体を動かす。

② ABA'からなる楽曲のAの部分を聴いて，2つの旋律が重なるおもしろさを感じ取る。

③ 全曲を聴いて，2人がどのようになったのかを話し合う。

熊本市のB小学校で2012年5月14日に実施した。

(2) 身体活動による楽曲分析

展開①でロボットと人に例えることで旋律の違いを聴き取ることができるのではないかと考えたが，だれも聴き取ることができなかつた。この曲は，冒頭からホルンによる旋律aが流れてくる。子どもの中には，それを前奏だと思っている子が多く，いつになったらロボットが出てくるのだろうと発言する子どもがいた。

そこで，2回目の聴取の際，はじめから「ロボットか人間のどちらかが出てくるからよく聴きましょう」と指示することにした。すると，「あっ，ロボットだ」という子どもの発言で，ほとんどの子どもたちが立ち上がり，肘を曲げ，拍の流れに合わせて左右の腕をロボットのように動かしながら歩き始めた。しばらくすると，それまで座っていた子どもたちも立ち上がり，全員が拍の流れに合わせて同じように腕を振りながら歩くようになった。

The image shows a musical score for the piece 'かね' (A part). It features two main melodic lines: 'ホルンによる旋律 a' (Horn melody a) and 'バイオリンによる旋律 b' (Violin melody b). The score is written for a full orchestra, including Oboe (Ob.), Clarinet (Cl.), Horn (Hr.), Violin (Vn.), Viola (Va.), Violoncello (Vc.), and Double Bass (DB.). The Horn part is highlighted with a box, and the Violin part is also highlighted with a box. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamics.

譜例3 「かね」Aの一部

次に、「今のはロボットだったから今度は人間の音楽に合わせて動きましょう」と指示し音楽を流した。すると、子どもたちはしばらく座って聴いていたが、バイオリンによる旋律bが聞こえだした後、立ち上がり上半身をなめらかにゆらしながら歩き出す子どもが現れた。そして、全員が同じ動きではないが、それぞれになめらかに身体を音楽に合わせてなめらかに動かしながら歩くようになったのである。

2つの旋律の違いは、ロボットと人間という言葉の比喻だけで2年生でも聴き分けることができたかもしれない。しかし、身体活動を行うことで、学習者である子どもたちは2つの旋律の動きの違いを明確に確認することができたと言えるだろう。そして、子どもたちの動きを見て授業者である筆者もすべての子どもが旋律の違いを聴き取ることができたことを確認することができたのである。

展開②では、この曲の冒頭4小節だけはホルンによる旋律aだけしか聞こえないことから、この部分を何度も繰り返し聴かせながら身体活動をさせた。子どもたちには、「ロボットだけだったらどうだろう。ロボットだけの世界に行ってみよう」と話し、音楽を流した。子どもたちは、音楽に合わせてロボットのような動きをくり返した。展開①で聴かせた音楽の長さと同じ長さを聴かせ、座らせた。

(児童a) ロボットだけでも楽しいけど、ちょっと寂しい。

(児童b) ロボットだけだと飽きる。

(児童c) ロボットだけじゃなくて人間もいた方がいい。

と子どもたちは発言した。

この発言をもとに、2人組でロボットと人間の役割を決め、音楽に合わせて身体活動をさせた。

4. 考察

実践①では、速くなるのは速度が変化したからだにとらえていた子どもたちがほとんどであった。それは、これまで速さは速度の変化で変わるということしか知らなかったからである。また、音の量が違うという子どもの発言でそれに納得する子どももほとんどいなかった。これは、速度は拍と拍の間の時間の長短によって感じ、リズムは音と音の間の時間や音の長さの組み合わせで感じるということが原因だと考えられる。どちらも音と音の間隔の変化がそれぞれの要素の変化につながるからであろう。このように要素の変化とそれをもたらす要因が共通あるいは類似している場合、違いを聴き取るとはたいへん難しいということが分かった。このような場合、一方の要素を聴き取らせながら身体で表現させ、もう一方の要素を知覚・感受させることで子どもたちはその違いがわかるようになり納得したのである。

実践②で聴き取らせた2つの旋律はどちらも3拍子であるが、演奏している楽器、フレーズの長さ、フレーズの表現の仕方(アーティキュレーション)が異なっている。したがって、楽器の音色の違いを聴き取ることができれば、旋律の違いを聴き取るとはできるのだろうが、今回の実践では聴き取ることができなかった。楽器の音色を聴き分けることができなかったのは、そのことを学習していないからなのか、聴覚が音色の違いを聴き分けるまでには発達していないからなのかは分からない。しかし、子どもたちは身体活動を通してフレーズの長さの違い、その表現の違いを聴き取ることができた。

2つの旋律の重なりについては、旋律aだけでは寂しいという児童の発言はあるが、これは音楽から感じたことなのか、物語としてロボットだけでは寂しいと感じたのかは分からない。身体活動を行わず音楽だけを聴いても同じ発言をしたかもしれない。しかし、身体活動を行うことによって、同じ旋律だけを長く繰り返すことがもたらす効果をより深く感じることはできたはずである。身体活動を取り入れたから聴き取ることへの意識が弱くなったのではなく、逆に聴き取ることへの意識が強くなったからこそ、何人もの子どもたちが同じような発言をしたと考えられる。

5. 結論

この2つの実践から次のことを導き出すことができる。

まず、音楽の要素の中でもそれをもたらす要因が類似していて、子どもたちが聴き取りにくい場合、身体活動を用いて分析聴取させることは有効であることが分かった。ただし、音楽のどこを聴いて身体活動をさせるのかという働きかけが重要である。どの部分を聴かせるのか、どのように聴かせるのか、何を聴いて身体活動をさせるのかということに留意することが必要である。

おわりに、

共通事項の設定によって音楽科学習によって子どもたちに何を獲得させるのかを明確にできるようになった。このことによって、何を学習させるのか指導するのかという内容を教師自らが設定することができるようになったのである。しかし、共通事項にそって音楽を知覚・感受させることは簡単なことではないことも分かってきた。本稿では、身体活動によって複合的な要素が知覚・感受できるようになる事例からその効果を見いだしたが、このことを他の学習にどう活用していくのか、そして、他にも子どもたちがより知覚・感受しやすくなる方法があるのではないかとすることも考えられる。

今後、そのような方法を開発し、子どもたちがより音楽を深く感じ取ることができるような授業を構想したい。

注

¹⁾ 高須 一 2008「音楽科における移行期の展望と実践課題」『初等教育資料 No.836』文部科学省, p. 28

²⁾ 身体活動、身体表現を音楽教育に取り入れる実践は、リトミックによるものなど多数行われている。しかし、楽曲分析に活用したものはあまり見あたらない。

³⁾ 小島律子 1983「音楽学習における身体活動の展開」大阪教育大学紀要 第V部門 第32巻 第1号, pp. 91-105

⁴⁾ 古市咲子 2005「楽曲分析としての身体活動の展開－中学校の鑑賞授業の場合－」日本学校教育音楽実践学会, 学校音楽教育研究 Vol. 9, pp. 55-56

⁵⁾ 城佳世 2009「音楽様式へのアプローチ－身体表現を通して」日本音楽教育学会, 音楽教育実践ジャーナル vol. 6 no. 2, pp. 87-95